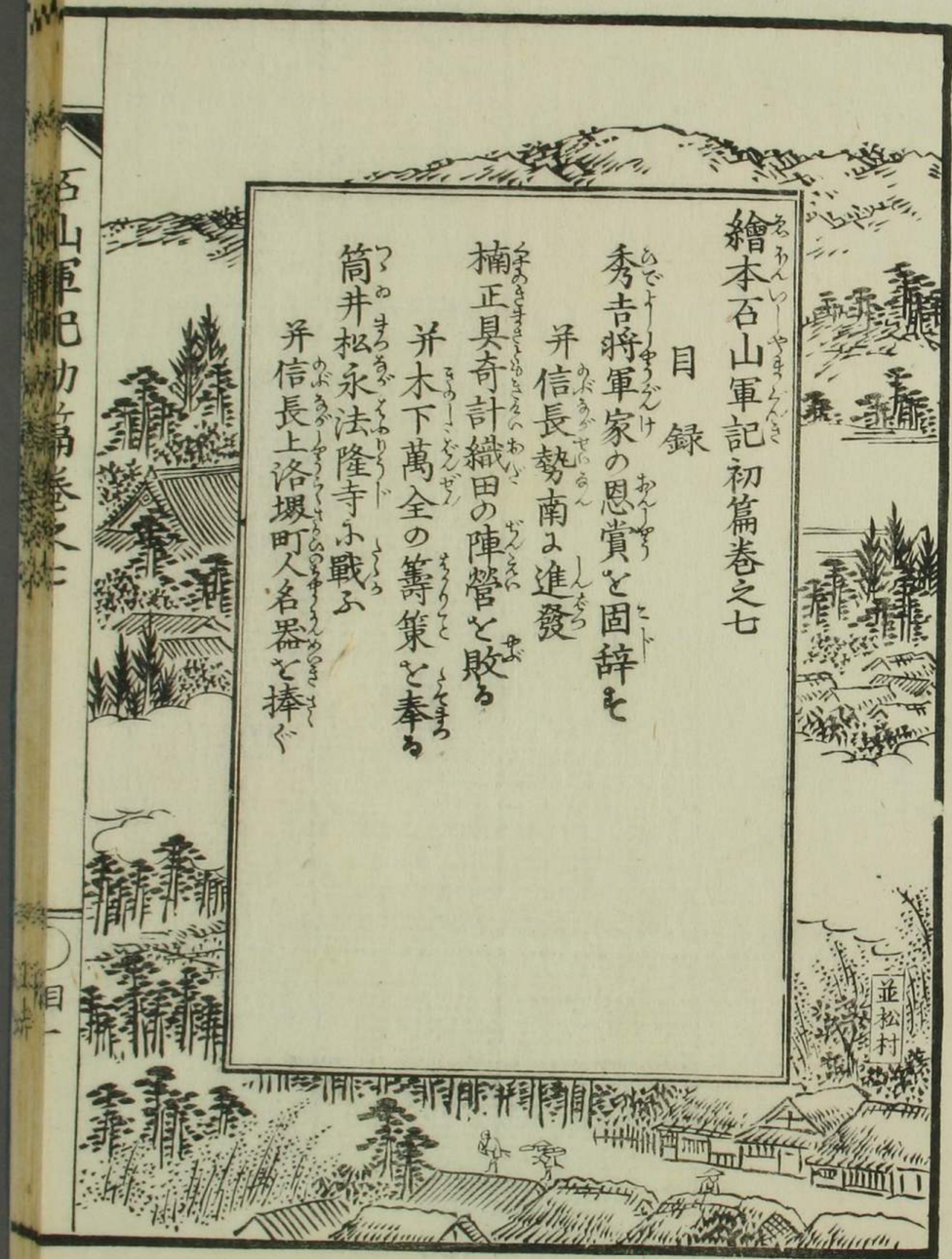
玉屋正義編輯

繪本石山軍記

七

特別遠入
2269
7

へ函14
2269
7

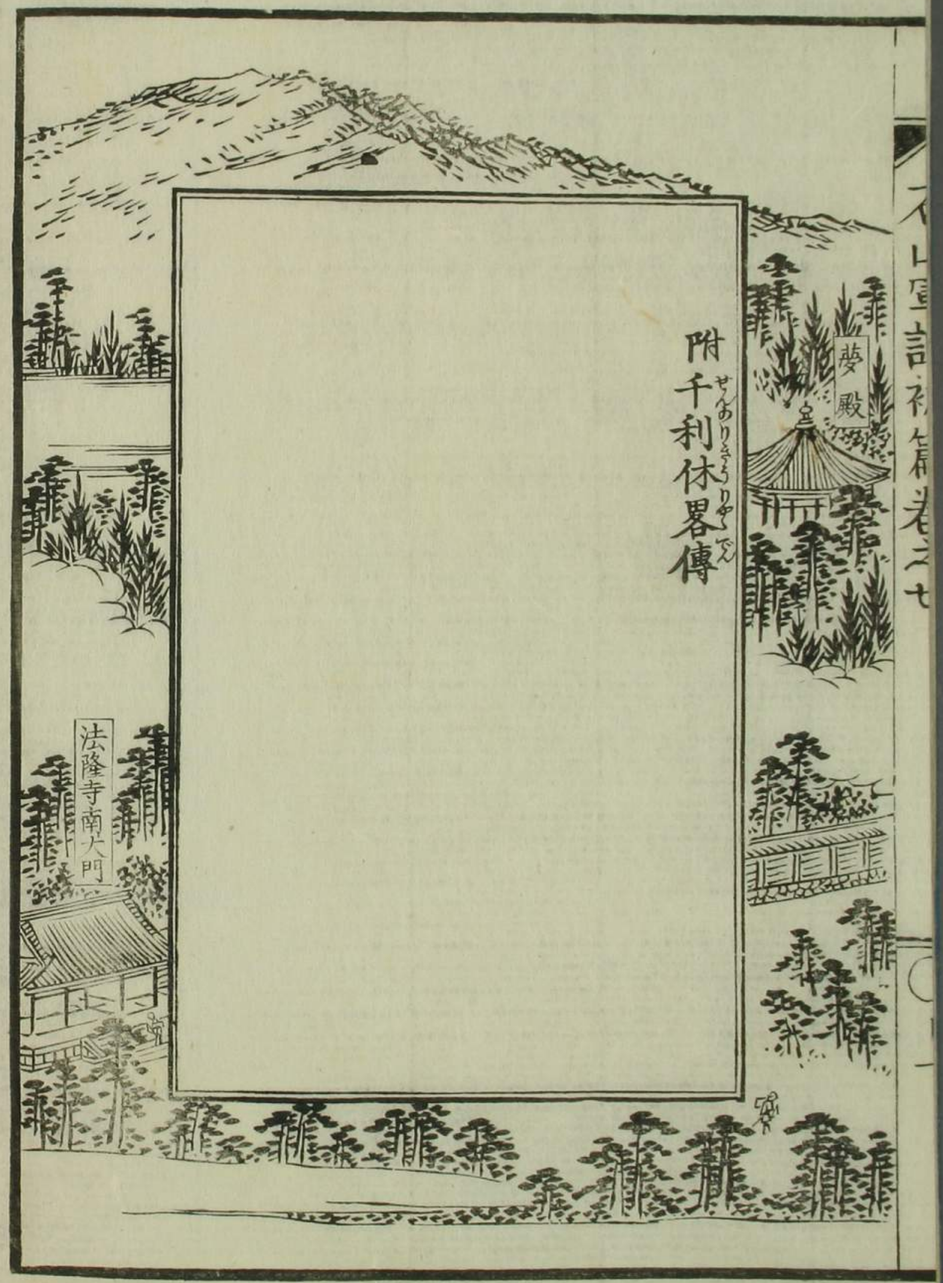


繪本石山軍記初篇巻之七

目録

秀吉將軍家の恩賞を固辞を
并信長勢南ゟ進發
楠正具奇計織田の陣營を敗る
并木下萬全の籌策を奉る
筒井松永法隆寺ふ戰ふ
并信長上洛堺町人名器を捧ぐ

並松村



附千利休畧傳

繪本石山軍記初篇巻之七

土屋正義　編輯

秀吉將軍家の恩賞を固辞し并信長勢南ふ進發織田彈正忠平信長朝臣。先ふ永禄十年北伊勢ふ雷發有て合戰ありしども悉く伏せざるゞ故ふ翌十一年の春再び彼地ふ出馬あつて攻寄らるゝ。終ふ北伊勢四郡とも平均ありといへども八田(来名郡)の城主楠七郎左衛門正具のゝ堅固ふ籠城して。國司の命あき内ハ開城ならじゝと由申し切て更ふ從ひ。信長怒つて責潰さんと有しども。木下諫めて渠を攻め。續きて南伊勢を平げんと思召べるゝ。大國ふして一且ふハ治め難くれべし。故ふ一先御飯國ならず然るべしと勸め

奉ることより信長ゐも所理ゐ思召滝川左近一益を勢州の總奉行ゐあさくま。素名貞辨の両郡を治め蟹江の城ゐ住〳〵く長嶋を押へ織田掃部助を安濃津の城代とゐ〳〵く南伊勢を鎮め〳〵ゑ。三十郎信包を長野の城ゐ置三月中旬岐阜へ飯城ゐつく。暫時衛氣を養ひめゐ。同年秋七月中旬より。新公方家御頼ミ有く。越前より御動座ゐつゝせられ〳〵故。九月七日出陣ゐつく江州を三日の間ゐ平げ。新公方家を守護奉りて上洛〳〵。京都を静謐ゐ治め。今年又永禄十二年初春より三好の蜂起と退治〳〵。御所を造営〳〵。漸五月中旬飯國ゐよつく。諸将をゑ〳〵め衆兵を休息せしめゐ。既ゐ春も過ぎ夏もおくりて初秋の比ゐつく。時候もよく成〳〵。木下藤吉郎が代りを誰ゐ命じんと。

信長の七男織田御長丸後ゐ武蔵守信吉と号も佐久間右衛門尉信盛。村井民部丞林佐渡守。島田所之助。五人を上洛せ〳〵め洛中の仕置諸事の政道ゐ相談の上ゐく取計べき由を仰出さる。五人の輩京都ゐ上り。将軍家ゐ此旨言上〳〵けるに。将軍家ゐも名残惜くい思召共是非なく木下ゐ歸国の御暇を賜ゐつく秀吉御暇乞のため御所へ出仕〳〵ゑ。将軍家御前近く召出さる。長く在京の勤労浅くゐ。殊更洛中静謐無双の大功ゐつく。依て江州長濱の城ゐ一万貫の地を添賜ゐるべき由上意ゐ〳〵ゐ共秀吉固く辞〳〵奉り。信長ゐつく過分の所領を宛行ゐ。罷在候へ聊も不足候ゑ。将軍家ゐの御恩賞深く恐入て候。信長の申付を守り些〳〵忠

義ふ似う候事を働き候へ。尓程の夏も候べと申て御辞退申上らまゝふう。将軍家う御直ふ岐阜へ御遣ゝさまゝる藤吉郎飯国して御目見の時信長仰るい彼将軍の御内意長濵を下さるべき旨仰出さまゝを何故ふ辞ゝ申てゝゝ。近頃不審ふ思召ゝなると有ゝ。藤吉郎謹で忠臣ゝ二君ふ仕へ秀吉不肖う候へども夫程の義い兼り及て候。我君の御恩山の如く蒙りゝ。人數もゝの如く引廻ゝ妻子所従の衣食まゝ乏ゝ。其上将軍の御恩を戴き候ゝ二君ふ仕ふる候ぞや。去ふゝ御辞退仕候ふゝ。別ふ所存候べと申上ゝ。信長又厚ゝ感ぜらまゝ藤吉郎い智勇抜群なるのゝなゝ忠義厚ゝ無欲の名士なると稱美あゝ。将軍家御懇志ふゝ上意あるを御請申上ざるい先以て失敬至極とゝ。早ゝく御請申上て然るべゝと申渡さまゝる尓ゝて後信長勢州出馬の評議あゝ。同年八月九日岐阜の城を進発あり尾張美濃近江北伊勢ホの兵士七萬餘人の着到ゝて翌日来名ふ着せたまゝ。瀧川左近将監一益待迎へ奉り御馳走申上るまゝい爰ふ一両日滞留あゝて。同廿三日木造の城へ入ゆゝ。城主木造具正父子并ふ柘植三郎左衛門瀧川三郎兵衛城外へ出て御目見ゝ。頓て城中へ招請ゝて さゝゝ饗應奉りゝ。其後信長合戦の手配をゝあゝ。先瀧川が勢ふ関の一黨を加へて森上野の両城を押へ織田掃部助ふ工藤衆を加

勢として今井徳居の寄合勢を押へさせ。信長の惣軍い其侭して
大河内北畠の本城ゑ押寄らるゝと定めゐふ此時北畠具教入道
不知齋子息新国司信意織田勢の寄來るうを関ゑく期し
らる夏のまゝ少しも驚ぐ氣色なく属城ゑ込置し輩へ軍の方
便を下知し防戦の備をぞ爲らるる先大河内の城ゑい国司父
子を大将として次男長野次郎藤教一族ゑい森本飛弾守其子彦
市郎方穂氏部少輔林備後守其子新之丞その余田丸波瀬堀内
園東田の面く郎等ゑい鳥屋尾石見守同與左衛門同右近将監水
谷式部大輔同藤次郎安保若狭守同式部少輔同大藏大輔同
左門同弾正左衛門同左馬允同次郎市岸江又三郎礒田彦右

衛門佐木源左衛門同又左衛門野呂左近山本左馬助長野九郎
オ木隼人日置大膳玉井兵部星合左衛門稲生勘解由水野
勝次郎阿曽弾正大内山但馬守を初として勢南五郡の兵士悉
く籠城せる。偖亦諸城を守る徒い今徳山ゑい奥山常陸ゑ上野の
城ゑい藤方将監阿坂の城ゑい大宮入道その子大之丞岩内の城ゑい
岩内右京亮八田の城ゑい楠七郎左衛門正具らづまも兵粮矢玉澤
山ゑ用意し。防戦の備厳重なりしども今信長の軍勢七万餘
人山野ゑ充満しく。旌旗天と覆ひ鎗長刀い日ゑ輝き其威風
頗る強大なりゝふ。諸籠城の大将分いゑて覚悟の上なれ
ども。其手の兵士末くの者どもい。敵の勇威ゑ恐怖し。ゝや臆病と

生ゞる。八月廿七日先手初め阿坂の城を攻らるゝ。迚木下明智坂井佐々ホ小命ぜらるゝ諸将おのく機ホ臨み寔ホ應じて爭戰ゝ。終め城主大宮父子を討取て忽ち小城を落ゝ。翌る廿八日早天ホ信長の七萬余騎。大河内の城の東の方桂瀬山め打上り追手搦手四方の手分をゝ。あゝ先東の方へ織田方の先陣柴田權六郎勝家。森三左衛門可成佐々内藏助成政。不破河内守。同彦三山田三左衛門尉長谷川與三郎。梶原平次郎九毛兵庫頭。同三郎兵衛尉。佐藤六左衛門尉秀方。丹羽勘助氏次。同源六郎ホ為り。南の方々長野上野介信義。織田掃部助稲葉伊豫守。池田勝三郎。丹羽五郎左衛門尉。和田新助。中嶋豊後守。同勝太郎。蒲生右兵衛大夫。同忠三郎。遠藤山城守。山岡美作守。永原筑前守。永田刑部。青地駿河守ホ為り。西の方へ佐久間右衛門尉信盛是へ京都の奉行職として在京せゝが。今般伊勢退治め洩るゝ支と歎き申さふ。態と呼返さゝて供ゝ為る。其手ゝ嫡子右京亮與力。飯沼勘平。市橋九郎左衛門尉。安藤伊賀守。塚本小大膳。阿閉淡路守。同萬五郎。三橋傳左衛門尉ホ為り。北の方へ齋藤新五郎。坂井右近。蜂屋兵庫頭。築田弥左衛門尉。中條又兵衛尉。野々村三十郎ホ為り。偖亦柵際見送りの役ゝて。前田又左衛門尉。湯浅甚助。生駒甚助。福富平左衛門尉。川尻與兵衛尉。村井新四郎。中川金右エ門尉。生駒小助。長谷川権助。佐脇藤八郎。荒川新五郎。瀧川彦右

衛門尉ホなり木下藤吉郎い昨日阿坂の城攻ふ浅手なり手負
しゝ。養療うさぐ浮武者となりて。弱うん方を助くべーと定め
らるゝ其勢都合七萬余騎四方を環つく取圍しゝ。如何なる
要害なりとも保ちがゝ見へうゝ。余まども此大河内の城といふい極て
嶮岨の山城ふて無双の勝地なり。七箇尾七谷ふめぐりく。南を大
河内といふ是搦手なり。其後ふ龍藏庵坂といふ難處あり。是と
野津といふ追手なり。又廣坂といふ所うい大木大竹生茂りく無
双の切所なり。東ゑ大河内の川深く西ふ養德寺といふ大寺あり
を焼拂ひ敵の足をたゆさゼードと構へうゝ。城中うん國司の一族譜
代の諸士勢州随一の勇士究竟の逞兵數と尽ゝく三万余人籠

りまい。寄手大勢なりとゝくども少しも怖まゞ持場ゝくを固めあ
急る色の見へうまい容易落べくとい見へざりゝ
楠正具奇計織田の陣營を敗る并木下萬全の籌策を奉る
さる程ふ四方の諸將下知を傳へて同時ふ攻詰両軍閧をあゝを追手
搦手東西南北ゝ鐵炮を打くまい城中うい大木六石を切落し
爰と專途と禦ざなり。敵味方合せく十万余人入替入ゝ国家
の安危但ゝの一舉ふあゝと攻るい尾濃の勇士なり。防ぐい累世重
恩の義士の徒勝員の色見へぞゝて。日い西山ふ傾けば。寄手い陣ふ
退き城兵も備を直ゝて憩ひゝ。此時木下藤吉郎を召まゝ汝宜
指揮ちべき由命ぜゝるゝふゝ。即時ゑ池田勝三郎信輝ふ謀略を

両士茶筌丸を
供奉して大河内の
城ふ到る

木下藤吉郎が智略ふ
ろく多藝谷の要害
を落し其上国司の
簾中始め諸将の妻
子を奪ひ取しふろう
信長ますく悦びぬ此
合戦の落去を秀吉ふ
任ぜられる四方ふ寄る
諸大将い間ふ合を遊

軍の秀吉ふ多藝谷
を乗これ何もも面
目を失ひく見へる
とぞ秀吉信長を勧
めて虜とせ女性を
ちぐく送りも使者
を以て利害を説め仁
心を顕し織田家の次男
茶筌丸を嶺子ふ送り
て萬全の計策をゐさ
ちりとと実ふ神策ふ
して柴田佐久間の凡
慮の及ぶ所ふあらず
茶筌丸い後ふ北畠中将
信雄と称ぞ晩年祝髪
して常真と号せるふ

授け其夜南方龍藏庵口の惣構市場の宿へ夜討とりもつ。火矢を放ちく柵の中なる陣屋を放火し。終ふ惣構の柵を破るく来込うう。是うう構綻びく四方の柵一圓ふ破る。城兵敗軍の色を兆せり。八田の城将楠七郎左衛門正昊うの由を聞く。寄手の英氣を取挫ぎ城兵の心を励さんと松坂川の北ふあるる。舩江の城なる安保中務安居新九郎と謀計を授け。又長嶋ふ篭りるる服部左京亮と語らひ石山本願寺顕如上人の御書を偽作し。長嶋の門徒を催促る程ふ即時ふ近隣の門徒我もくと馳集り瞬息間ふ一萬余人に及へり。此輩へ郷人といへども何まも究竟の者どもうて武勇を心がけつる逞兵なるまべ服部左京亮へ楠が謀畧のごく。一万人を二手ふ引

分。長嶋の門徒の首領道場坊を一手の大将とし。南無不可思議光如來と書るる大旗を押立。五千余人信長の本陣桂瀬山を襲ひ。一手へ服部右京亮と大将とうて五千余人同じく名跡の旗を押立織田の陣へと進発せり。斯て寄手の柵際ふいうり石山本願寺の門徒ふ候。今般天下静謐のため大将軍馬を起さるる条感心の至ふ候。ちまふちく御加勢仕り候へと本願寺上人うり下知候て泰上仕候と偽り。終ふ陣営の近辺ふ止宿し。其夜楠正具寄手の陣ふ夜討し。彼門徒の一揆と牒し合せ謀畧うく。織田の陣を大ふ破り。御本陣を驚かし大ふ乱妨なる。織田方へ思ひも寄ざふ支るまべ討ろく者數を知らず。信長大ふ怒つく宣ふやう。石山本

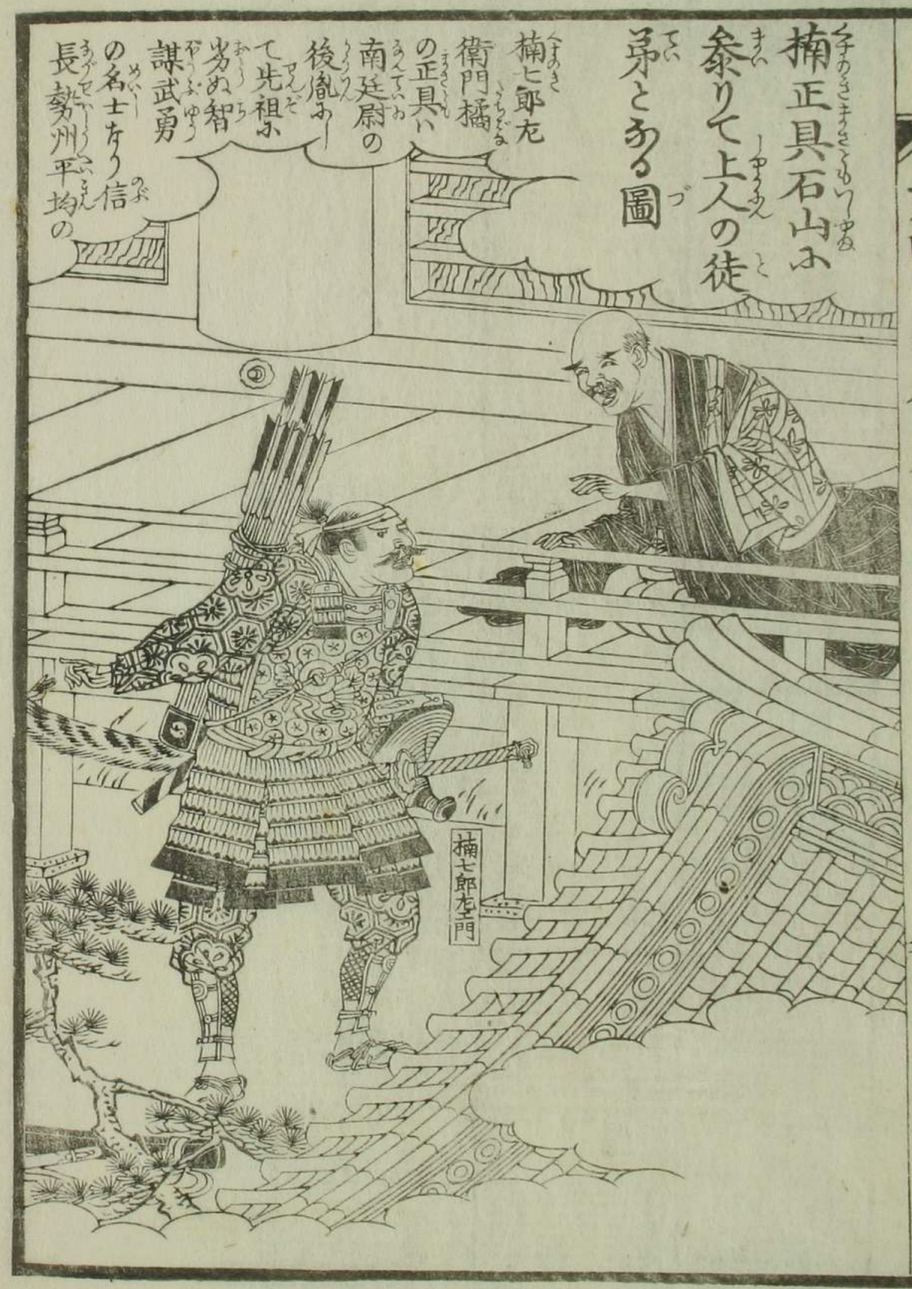
願寺の門徒等が所為悪むる余りあり。當國平均の後直ちに摂州へ進発し石山を責落し顕如父子を生捕彼門徒ホを悉く討滅し。此鬱憤を散ぜんと罵りあひく。遺恨を尚も重ねまとる。斯て八月下旬より十月中旬に及まで手を尽して責るとい共未落城せざりし程ホ木下種くと智略を廻らる。此に本城の東南ホ多藝谷といふる嶮岨の切所あり。此に国司不知齋入道舘を營造く。簾中ちゞめ姫君公達を籠置き尤一族大河内宮内大輔森本飛弾守を大将として二千余騎にて堅めり。原来要害絶景の処なれども不知案内の者の容易く至るべき地ホあらず。然るホ秀吉例の諜の者を入て間道の路次を探らしめ。三千余人の兵士を分ち五百余人い間道を図取し諜者を先ホ立此谷隨一の難処を越岩を傳ひく忍び上らせ多藝谷の舘の右なる林の茂るホ隠しおき。残る二千五百餘人をい谷の本道より押寄せ。十月廿一日の暁方ホ山路を廻りく攻上る城中にい思もよらぬ。此所い嶮岨にく不知案内の者の容易く來るべきホ非ずと。己が心に心を許し。且籠城の初より一度も敵軍押寄し事なき地ゆ自ら用心も厳重なれば油断の處ホ木下勢不意ホ起つく寄せ有ども要害にて城なまべき急ホ來入事あらば。坂の下ホ押寄せつ。鬨を一同ホ揚るる。此時忍び〳〵五百余人舘の後ホ難なく出大手の容子を窺ふ既に合戦なりと見へ鬨の声谷響ホひゞき舘

の宿直の兵士も過半大手の持口ふ向ひ殿中空虚なりしぐ時分へ
〻と乱れ入出合者とゞ切倒し奥の間ふく進こゆき敵軍此
ふ寄て候早此方へおこしませと家臣ふ似たく方便つく國司の北の方
を始め一族諸将の妻子従類一人も残らず三十余人輿あるひハ筵
輿ふうさのせ奪ひ取てゞ走りくる大手を防ぎ戦ふ兵士ふ舘の方
何とゆく物さんぐ〻周えるゞ如何なる事ぞと打驚き駈付んと
思ふ折柄舘の後の樹木の岡ふ急然と火燃出須臾の間ふ大火と
なる焔天を焦し城兵の方へ吹付くるゞ流石の諸将も驚周章
散乱なる夏甚しく要害堅固の大手なれども守る兵卒乱れ
あひ防禦の備へ定まらゞ右往左往ふ敗走を木下くれを見なく

驚破攻入時なるゞ早乗入や兵どもと下知ふ随ひ我一と〻ふ切〻る
逞兵ふ岩を傳ひ堀を越〻〻と込入て狼狽さらぐ城兵を切伏
突伏追まくる内ふ城門を押ひらけば惣勢一度ふ乱入し無二
無三ふ駈立るふ城兵討るく事數なきぞ守護の将なる鳥屋尾
與左衛門水谷刑部心い弥猛と〻共是を防ぐふ術なく本丸さし
て退るるるる忍ちふ此口破き寄手十分ふ勝利を得て秀吉
舘の内ふ打入落残りなる女性足弱の老若を労るる然るべき人くの
を伴なひて本陣ふ引くを此外山間ふ伏置し兵士い此舘を乗取
守護し本丸なる大勢討て出なば防戦ひ〻〻とて俄ふ柴築擣を
築て少しも油断なく大丈夫なぞ持固めり信長の本陣〻〻い此間

數日の城責ふさ〳〵たる勝利もあり〳〵程ふ散くふ不快の処今日の秀吉の勲功他に異なりと感じあひ斯る上ハ當城の落去を木下の籌策ふ任さるべきとの支るり〳〵依て秀吉本陣に参上し合戦の始末を言上し猶萬全の計略を委く申入るまゝ。信長も道理ふ感伏しあひ其詞ふ随ひあひぬ。去程ふ北畠の本城ふハ要害無双の多藝谷を落さるまゝ剰さへ簑中おゝび諸将の妻子を奪ひ取まゝ〳〵支言語同断の次第なるべ。何まも力を落し〳〵あるまゝ果るふ〳〵国司父子も大ふ周章し且い恩愛離別の悲嘆ふせまり。如何ちゞくさと仰天し左右の詞もなり〳〵処に信長の使者来りて簑中と始め都て多藝谷を奪ひ取し女性幼稚の人々悉く送り

越る由を告るふ〳〵。誠〳〵くい思それぞ乍ら。人を出して是を見せしむるふ実ふ国司の簑中おゝび諸将の妻子ふ相違なれば。取次の兵士本丸ふ如此〳〵と申達を国司父子その意を得ざれ共簑中の無支ふ還りあひし嬉しふ門を開くく使者を迎るふ其使者に来り〳〵い前田又左衛門尉菅谷九右衛門尉ふして案内に従ひ本丸ふのぼり頓て国司父子ふ拜謁せんとを望むふ〳〵国司不知齋入道對面あり〳〵まべ前田菅谷まづ使節の礼をなし。さて申るハ夜前當手の侍大将ふ木下と申者。多藝谷を襲ひ国司の館を衆破り。御簑中を初め奉り。諸士大将の内室以下を奪取い支軍の風ひ近頃拠るき儀ふく候。然なば〳〵是全く信長の本意ふ


子のさまざまもつぬ
楠正具石山ふ
参りて上人の徒
弟となる圖
楠七郎左
衛門楠
の正具い
南廷尉の
後裔ふ
て先祖ふ
劣ぬ智
謀武勇
の名士なり信
長勢州平均の
楠七郎左門

時度々織田方の軍卒
とゐやま終ふ和睦の
曖昧あることくも後
難あん事と察して
これふ應ぜん妻子と
引具して勢州八田の
城と退き摂州石山ふ
至りうねく一向宗門
と飯依し上人ふも拝
謁して是まで毎ふ音
信と通ひくる故上人ふ
願ひ薙髪して
御弟子となり
定専坊と
号しる

候そぞ因て供奉し候ところの方く悉く送り飯し奉り候。抑信長
北畠の御家ふ少しも怨恨なくんべ軍兵を発し御城下ふ陣を張
候支国郡を奪ふ為ふ候そぞ去し頃室町将軍家三好の為ふ
襲ふまさせめん。不慮ふ早世まし〳〵る後今の将軍家義兵の御
旗を揚らまし〳〵ふ。信長速ふ御味方ふ馳参忽ちふ凶徒を誅し難
なく室町御所を再興なし奉り候支天下普く知る所なく候其後
五畿七道の間ふ住し国郡を領する輩何まも馳上りく将軍ふ拜
謁し奉る然るふ當家王城を去て遠ふ〳〵ぬ。伊勢国ふ住居仕り。
将軍家へ些少の會釈をもなし〳〵ぬるぞ況や将軍宣下の賀をも申さ
まぞ偏ふ三好合体の逆臣ふ〳〵き行状なくぞや。信長苟くも将

軍の台命を蒙り其罪を紀さんが為ふ進発せし処ふ然るふ尋
常ふ篭城をなしあふを以て斯の如く合戦ふ及ぶ是ふ〳〵年ら将軍家
の台命を重んぜるが故なり今有ども国上静謐ふ万民安堵なるべ
べき本意ふ〳〵聊も不義無道の業をなし候そぞ其為ふ簾中
以下諸将の内室達ちく〳〵送り帰さるて候早く前非を後悔の
なく将軍尊崇の礼を厚くし領分安全の思ひを定めなべし。
此迫敷田の合戦ふ弓箭の義理い顕まてい無益ふ士卒を滅し百
姓を傷まし〳〵めらんとう信長と和睦なしなべし〳〵今あくんべ信長よ
ろく京都へ執奏仕り北畠の家の首尾愛度申ふ計ひ申さべさ
なく候新国司御前ふ肥満の御病なく御出仕も御難義のよ

承り及びて候信長が次男茶筌丸を進らせ候。新国司の妹御を婚姻ありて御家督なり。京都の出仕を勤させらるるは次第小繁昌の基なれば候。信長決して非道の事とは候まじ聊か御疑念あるべからざる候若又御得心なく勇氣を頼ませらるる篭城ありて運を天に任せらるるとの御事なれば候。是非もなき事なれ。但将軍を敵に引受させあり我々を責手とする。幾程なくさせたるべき能々御思案ありて御返答あるべしと演べるふまり国司父子前田菅谷小段々の芳志辱き由を申さるるも何れも一族郎従等と評定の上返答に及べき由なり。両人を別席に請じ種々饗應さて国司父子一族郎従うち集り評議あるるに此も籠城して年を経るとも信長と討取程の術あるべくとも思はるるなり。又隣国より敷後詰の便宜もなく一度二度寄手を打破るとも味方も馳加はる勢なく敵い日ふまず夜ふまず勢うさめば囲いまもなく密なり。蟻の這出る透間もなく斯ていは遂に信長の為に攻落さるる。家督滅亡せんとも遠からず然らば信長の申さるる旨に従ひ和睦を取結びあひあひ差當り軍を止めて国民を安養あらしめ籠城の兵士も休息して再生の思ひをなすべし急ぎて両使へ此旨を以て御返答然るべしと勧むる者多くして国司父子も此意に同心して頻て両使を呼むに朴木集人を引合せ信長の本陣へ返答の使者に立らるるべし信長も直に集人に對面あり。集人

譴で申ろい信長公の懇志を以て城中一同蘇生て候と。莫大の仁心と申べし。其上ハ木下が爲ハ虜とゐるゝ国司の簇中以下悉送り飯さゝ候支異国も本朝も未ゞ其例を聞ぞ此一条を以て信長の御志の程と感心仕り。御礼の詞を知も且ハ将軍家へ御疎略申さゝ罪科軽ゝゞ候とも御恩ようり赦免あるべき由実も優曇の華まち得る心地して候。是等の所厚く御礼申上候ゆゑ。申付て候と言上ゝゝゝ信長悦喜斜ゝゞ使者と厚く饗應ゆゑ重ゝく織田掃部助を使とゝく城中へ遣さゝ弥和睦の盟約を結だまゝんゞ国司父子大ハ悦ひ約束を堅くして既ハ両家の和睦調ひしゝゝ信長四方の寄手ハ下知して軍勢を引上ゆゑ岐阜の城ゝ茶筌丸今年十二才を呼ろせ城中へ送らせ給へゞ国司父子も心を安んじ。則ち不知齋入道桂瀬山の陣ハ於て信長を請ゝ。對面の儀式首尾ゝく調ゝゝゝ船江城中の徒も国司の下知ハゝく城を開きゝるゆゑ信長國中を平均して夫ゝ仕置を定めゆゑ不知齋隱居の身ゝるを以て大河内を退去ゝ。茶筌丸ハ小瀧川三郎兵衛尉柘植三郎左衛門尉其余織田家の士多く後見の爲ハ附らゝ船江の城ハ住せ。十万石を領せらる又織田掃部助を南伊勢五郡の總奉行ゝて茶筌丸を守護さゝ。三男三七郎ハ関の一黨の大将ゝゝ。五万石を領して神戸の城ハ住ゝ。瀧川左近將監一益ハ北伊勢の奉行ゝのゝ。且尾州西方長嶋を兼帯を斯て

勢州ちぐて平均なるみよう。信長八田の城なる楠正具が奇策と設て味方を苦しく支と深く憤りあへ此次ふ攻亡し。正具を誅伐ちぐしと有ると。木下ちまと宥めく和睦あん支を勧め八田の城へ此由を申達せしうび正具承ろう大ふ歎息し。我數回信長を苦めし者あまべ今日和睦あるも後必ず余支ちく罪せしまん事疑ふし。と信長の胸中を見透し。暗ふ妻子を引具し八田の城をかちく摂州へ馳登り石山本願寺ふいろう顕如上人の御弟子と成薙髪して門徒の中ぞ加るる後一箇の末寺をひき三番定専坊とそ今も猶顕然さう。大坂天満七丁目ふあ信長此由を聞あい弥楠を憎まるせめへ石山ふ遺恨と重らまる。尤此事及び勢州ふ於て長濱の門徒等楠が謀略ふよろく織田家の陣を襲ひし條等ハ顕如上人の知し召ざる事あまども。信長ふく怒はく石山を怨敵とし終ふ十有余年の合戦ふ及びるぞ是非あらまき。斯く信長ハ楠が為業の怒りを押へく。勢州より直ふ上洛ありく。将軍家ふも拝謁ふし給ひ北畠和睦勢州平均の始末詳らふ言上しあひしうび。将軍家ふも殊更御感ありく。長光の御太刀を下さまる。信長禁裏へ参内し給ひ御普請を見分あつく。弥怠りあく出精いたべき様丈々み申し渡さまき霜月十七日京都を発足し。濃州岐阜ふ皈城ふしあふ

筒井松永法隆寺ふ戦ふ并信長上洛堺町入名器を捧ぐ　附千利休畧傳

却説松永彈正久秀ハ去年十月信長の本陣東福寺へ参上しく前非

を悔て手を束ねて其罪を謝せしふより信長こゝを免されて且願ひふ任せ和州の國中靜謐ふ平均いたんべき旨命ぜらるゝ早々本國ふ引とりかゝる筒井家の繁昌を見て日夜胸を焦せしが大和の國中平均の許をうけて日来の本望成就せりと歡びけり和州を一已ふ領せんと謀りける時ふ今年永禄十二己巳の年久秀歳六十嫡子右工門佐久通歳二十七大和河内摂津紀伊の知邑父子合て三十余萬石を領し和州信貴山多門山の両城ふ代々在城して元時も筒井の城を落さざるゝと和州の麾下摂河の一類を語ふ先大和の麾下逢坂の城主岡周防守國高古市の城主古市左近景治を始め菅田備前守豊春高山主殿頭廣頼等を催ひて置き多門山ふ東大寺の大衆ふ番勢八百余人を

籠らせ信貴の城ふ當山の大衆ふ龍田立野の社人等を加へ一千余人ふて守らしめ河州狭山の城主森藤五郎正次同弟藤九郎正之摂州平野の城主森本正友等大和の麾下と倶ふ總勢七千余騎永禄十二年春三月九日法隆寺まで打出る先陣岡高山古市等一千余人二陣ハ右工門佐久通海老名兵衛等二千余人後陣ハ彈正弼久秀細川六郎海老名介九郎山口六郎岩成小次郎其外近習馬廻り二千余人外ふ精兵二千余騎法隆寺の境内ふ伏勢とし法隆寺の大衆も五百余人ふて扣へさり此由筒井の麾下より早馬を以て順慶ふ注進しけるまバ筒井方ふも先達て織田家より使者到来して國中平均の軍議沙汰なるべき由いひ送らましかバ筒井もの孫て松永を征伐せんと期しられバ三老臣嶋左

近友之松倉右近勝重森志摩守好之と始め麾下の諸将を促し。
尤行程の遠さへ告るふ間あらばこそ先さしゝ當りて高取の城主越智
玄蕃頭利之箸尾の城主宮内少輔高春清須美の城主清須美右
衛門尉盛時猶原の城主小林右衛門尉光之慈明寺の城主筒井左
門順国等ふ及べり斯く先陣あハ嶋松倉一千余騎二陣ハ猶原一千
余騎越智箸尾慈明寺森清須美等ハ順慶を守護し旗本二千余
騎。時ふ順慶二十一歳同十一日の未明ふ両軍法隆寺の並松ふく寄合
互ふ関を作りちけ嶋松倉岡古市高山等と打合く鉄花を乱し切結
び終ふ双方へ引退き暫時人馬の息を継うろう。二番ふ猶原右衛門
尉一千余人ふく趣出うり松永久通うきを見く敵ハ小勢ぞ餘さじ

討くや兵どもと下知しつ。海老名と両勢二千余人引包んぐく攻ふろ。
猶原光之二十三歳血氣の壮武者些もひるまじ半月の立物ふ猶原連
銭といろ名馬ふ跨り大長刀を左の脇ふ狹く絲追取く趣まるう。敵十
余人薙倒せしゝ松永方こきふ恐怖し引退くふ右工門久通猶原が
後備へふ切入く。雑兵を斬まて追散しうきゝ裏崩れしく見へし
程ふ嶋松倉精兵百余騎ふて趣出松永右工門を引包んぐ火水ふふ
きとぞ攻ふろ。海老名岩成本陣より駈出く嶋松倉と掛合しが。
名ふ聞へうる双方ふ切立らきく松永方乱き立く信貴山の麓まで
敗走に弾正久秀ハ態と一戦も及ぐ闘道をとく引退く嶋松倉
ふ目配せし引き心得ぐさしと馬を扣へく進まぐりしが猶原を始め若

武者どもへ追ひけく二百余人を討とりる。本陣よりも壮士ども
抜ぎけ〳〵百余人を討取り。去程ふ順慶ゲ旗本手薄ふあり〳〵見
へる処へ寺内ふ伏る森兵助の二千余人起立て得とりや賢〳〵と順慶
ゲ陣ふ討〳〵かゝる本陣へ油断の上の小勢あるバ二百余人討とられ敗北
せ〳〵ゲ箸尾宮内三百余人蹈止まり。数防ぎ戰ふ間ふ越智と森とハ
順慶を引圍〳〵退き行処ふ法隆寺の大衆五百人道を塞ぎ〳〵通
し得ぶ。越智玄蕃頭是を見るより。悪き坊主等ゲ挙動〳〵ふと大太刀
真額ふ〳〵さ〳〵敵の中へ面もふぶ討入り。森志摩守も大将の御身
の上危ふ〳〵と同く太刀抜ぎ〳〵。矢庭ふ敵三人を討とり。五人ゑ手
を負〳〵り。然ども味方ハ僅ら十騎ふ足らぬ小勢あるど一生懸命

と敵ふ的つく戰ひつ順慶を落さ〳〵む順慶も討死ちんと。筒井什代正
宗の太刀を抜らけ馬引ゑ〳〵。森好之大ふ怒つく是を制め敵五六人
切倒し順慶の馬の口を取大将ハさハせぬりのぞと諌め乍らる落ゑる。
然るふ筒井の本城へ松永勢責懸ゑるまバ無念ながらも
筒井へ入得ぞ。森好之ゲ指畠ふ任せ宇陀の郡を志し明山さ〳〵く
落らまゑる。筒井方の先陣二陣ハ後陣の軍ふ順慶ハ討死有し
岡へ〳〵べ惣崩し〳〵敗走し〳〵。此時両軍の討死九百余人手負
一千餘人ふ及べり〳〵ぞ。松永の旗本二千余騎ハ間道を経て筒井ゑ
至り。城を囲んで攻るゲ城代飯田三郎次郎直宗五百余人ゑ守護
せ〳〵故強く禦き戰つ心ハ頗る猛し〳〵とゝども微勢ゆく怯ぐ〳〵ゑ察

既ふ日も晩夜ふ入しゑ女性幼稚の輩を裏道うろ落し遣り我も忍んで南都ふ落るる斯のぬしの次弟あまべ雑兵ホハ我先と思ふが侭ふ落失ぬ去程ふ松永方ハ筒井の城を乗取て森藤五郎正次同舎弟藤九郎正之五百余騎みく在番せ同十二日松永父子ハ年来の本望達しぬと諸将諸卒の軍功を謝し千春樂を唱へる尓後尚も此勢ひを以て筒井家の麾下を討従へんと議しうり偖亦筒井陽舜房順慶ハ宇陀郡明山の城ふ落行しゑ城主明山右近直国ふまを請して堅固ふ守護せしゑ山田の城主山田太郎左衛門尉順清十市の城主十市兵部大輔遠忠北小路の城主飯田出羽守頼直辰市の城主井土十郎大夫國秋福住の城主

福須美兵衛尉順弘その余中坊左近今井兵部房乾水間別所の一黨并ふ興福寺六箇院の衆徒吉野多武峯の大衆追くふ馳加ろ終ふ本城を取返し會稽の恥を雪めるる順慶ハ三老臣もに筒井の本城ふ飯入し麾下の諸将諸士みべふ諸家の良従ふ至るまぐ扣さ集め猿樂田樂を催し大ふ饗宴して云く今度松永父子ふ切勝のこあべぞ本城ふ還る支諸将諸士の忠勤みてその勲功山ようも高く海ようも深し自今いよく水魚の思ひとなし松永父子を討亡し和州を平均をべしと感状及び太刀薙刀金銀衣帛ホ山の如くふ与へて大ふ賞しるる又奥福寺の六箇院おべ今井房吉野多武峯の法師ホハも金銀衣服を若干贈て戦労を謝し

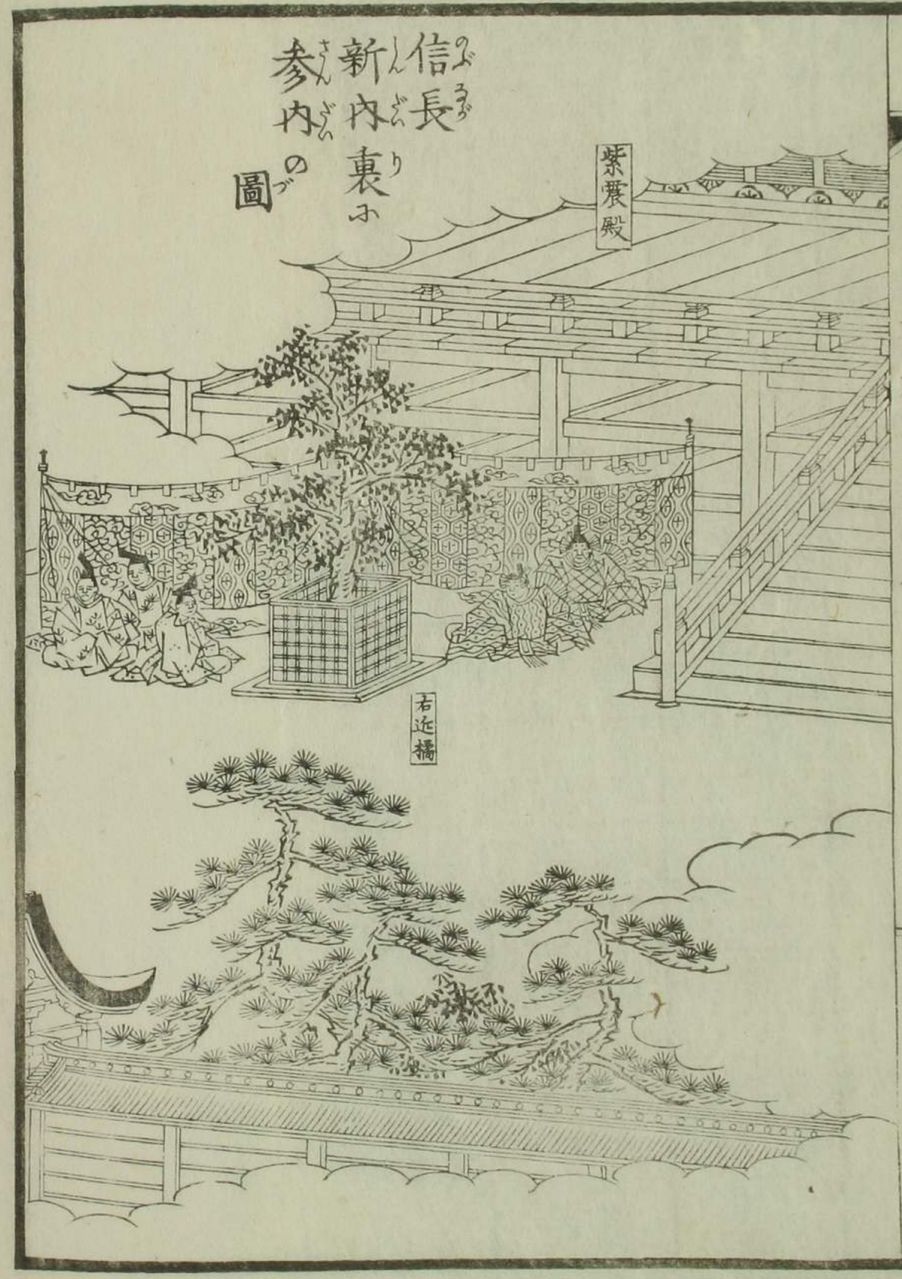
ける偖亦順慶法印い岐阜ふ使者を遣し。俊成卿の古今集来国次の太刀筒井鹿毛の名馬ホを献上し。益く御麾下ふ属し候て。五畿内表ふ於て忠功を抽んぞづさ由を通じる。信長大ふ感悦ゆへ。懇の御書及び駿馬三疋を賜ふる。斯有し程ふ松永父子も順慶ゞ内謀を図く。老臣佐久間右衛門尉信盛ふ好を有るまゞ此り付て不動国行の太刀藥研藤四郎の太刀等を献じ只管ふ諂ひる。斯く後信長ろの命ろく佐久間右衛門尉明智十兵衛両人を遣さる。筒井松永の両家和睦いたさせ扱ひゆへよろ。陽舜坊順慶い筒井の城ふ安居し。松永久秀い信貴山ふ平住し。右衛門尉久通い多門山の本丸ふ在城し。又信長ろの目付ろて山岡

美作守景隆二の丸ふ在番セ是依て大和の国中の地迫合争戦等止く静謐ふ治りる遠近の合戦ゑ其年も暮く。永禄十三年庚午の春を迎へる。織田家の武威まもく盛ろて向ふところ伏さとつふ支なく別しく去年伊勢国を平均ゆく後い隣国ふ威を争べき者無りるよろ。信長越前の朝倉を誅討セんと思立めへしるども夫を披露あゝ敵方ろても用意をもべれい只何るく上洛し帰路ふ至つく不意ふ越前ゑ乱入せい必定勝利ゑらんと工夫なしあいしゑ早春い北国の風ろく未ゞ雪深く進發難儀ろふろ暖氣の催セを見合セめへ漸ふ時日を移し二月下旬ふなりるまゞ信長内裏御造営成就の御悦且い年號改元

の御評定の爲と披露あるべし。二月九日岐阜の城を立せめいる。近江国常樂寺といふ所ふ着せらるる日国中ふ其名高き角力の上手ふ集り御馳走の爲にて相撲を興行し御上覽ふ供ふる時上手と関えい百濟寺の鹿宮居の眼右衛門大唐の正權河原寺の大進など手を尽して取らるる中ふも鯰又一郎とて名者ぶけく三番勝らるる。信長幾興ふ入めい夫こふ御褒美を下さるる。斯く此地と立せめい三月五日ふ京都ふ着せめいく典藥頭驢庵が宅を本陣と定めらるる。

驢庵が宅い烏丸正親町の北ふあり。相傳ふ古施藥院の有し舊地なり。驢庵い通仙院瑞策と号を和氣清麿二十三世の孫春蘭軒明親乃二男なり。和氣氏ふて半井と称せ此家内の中間ふ大なる井あり。板を以て是を隔て半い製藥の用ふ充半い雑用の水とす故半井の称号あり。同十四日二條の御所ふ於て將軍家御能を催さる。信長を饗應あり。余後信長内裏御造営成就ふ付御悦の叅内あり。しかるに叡慮斜なりぞ此時正四位下ふ叙せらるるて退出あり。偖亦泉州堺の津の福有の町人ふ所持せる珍器名物を御覽あるべしとて。松井友閑法印と丹羽五郎左衛門尉長秀と両人ふ命ぜらるるふより此由堺の津の南北へ觸流し。各々所持の輩此度奉らでいなて。面く持上りく四月智上覽ふ備ふ其數數しく集りなると信長一く御覽あつて勝れたる留置あるべく則ち懸ぜらる價値ふ過分の御金を賜りたる此

信長新内裏ふ参内の圖


紫宸殿
右近橘

水かくれしてあるれの
雨ふ咲ぬるん
大内山の
たえく雲なる
緒平
君ゝ代を
やちよと
こめく
九重の
大内山ゝ
雲ゝ永
孫夫
月華門
信長
承明門

者ホ頓ホ徳を得るゆふ喜悦しく飯りるとゐん其秀逸なる器ゆゑく御意ホ入しい天王寺屋宗及ゞ呂記ゞ菓子繪藥師院の小松鳥の水指油屋常祐ゞ柑子口の茶入ホなり（右是ゆ先永禄八年信長公へ今井宗久ゆ拵嶋）

（菓茶壺武野紹鷗ゆ菓子繪を献上せり是ゆ堺の住人なり）

拵ぞるホ此時千利休の名図へぞるい既ホ信長ホ仕へ居しりのゐるべし。利休も堺の住人ゆゑく南荘今市町の産なり姓ハ田中氏ゆ。先祖ハ室町家ホ仕へく同朋ゆり千阿弥と号を故ホ後改めゆ千を以て氏とん。俗称を納屋与四郎と云先くゆ久しく堺ホ住して魚問屋（納屋ハ魚屋）を以て渡世し。家繁昌して富貴なり十七歳の頃ゆ茶道ホ心をゆを北向道陳武野紹鷗の両翁ホ従ふく奥儀を学ふ剃髪して抱笠齋宗易と号を利休ハ其道号ゆ。

永正十五年戊寅どゝホ生まめまゝ今永禄十三年ハ五十二歳ゆるべし。猶利休の傳ハ後くの篇ホ委しく出せゞゆゆふ略を

信長入洛のゝゝめ三好松永の奢侈を悪まゝ程ホ都て驕を禁諸民を愛求んゆゆ種く善政を行ゆゝ貴賤ゆゆ悦び安堵なゝゆゆ安ゆふ居く危ふゆを忘く風ひ諺ホいふ人実ゞ入い仰むくの例ゆゆ身の樂しゆふ任せ漸ホ過分の奢をゆし却く信長の制法の厳酷ゆゆを誹謗し御旅宿半井の家の門の扶り落頌を一首張ゆ

なゝゝい又織田どのや忍ぞもん憂と三好ぞ今ゆ意しき

信長の御目ふかゝらぬ御怒りあるゝ厳しく御吟味あるべ六〳〵ゝん
とて番の兵士ホひそゝふ取ちてく披露せざゝ〳〵となり偖亦織田殿
ゝゝ京都ふ數日逗留あゝゝゝゝゝゝ畿内近国の諸士ホ追くふ馳上り
種くの品を献しく御礼を申ゝ是い信長内意あゝく越前の
朝倉退治のゝふ召連らまん支度なりとゝく既ふ大概参着し
終つゝらぬ信長一統ふ召寄らまゝ仰出さまゝるい国郡を領し武士
の上首ゝる者いゝある辺土遠境さゝゝも将軍家へ参勤をべきこと勿
論なり且い公儀への忠志なり大名の家職なり誰り是と思ゝぐべき
況や近郷隣国ふ於てをや爰ゝ越前の朝倉義景い帝都を去と
遠ゝゝゝ国ふ住し先代将軍の御恩ふゝゝ御相伴衆の列ふ加へらま

聽近の奉ゝ他ふ異あゝ〳〵家格なり是ホの條と思召まゝ當公方家
御歸洛の後毎度使節と下さまゝ御内書を賜ゝゝ召くとゝゝも一
度も上洛せぞ剰さへ北国ふ威をふるへ私曲多く不義不忠の至り言
語ふ絶きゝ将軍の御職分ゝゝゝの者と戒めまんが爲ゝゝまを
御ゆゝ〳〵たらぬ他家又是ふ准ひ自由と企申べし〳〵斯くい四海静謐
の期あゝぬ是ふ於て信長公方家の上意と伺ひ越前へ出馬
朝倉の罪と糺し其後北陸一道の大小名将軍ふ従ざる者を退治
らぬ〳〵方く随分忠戦と勵ゝ軍功を顕ゝ将軍の御感ふ預らる
だ〳〵と有ゝゝゝ参會の大小名いまゝも承ゝゝ何ゝゝ朝倉ゝゝ三
年の間使節と奉らぬゝ条無礼なり其罪と糺まゝ征伐あんとゝ

御諚所理なり速ふ御発向あるべしと申さるふる。信長大ふ悦喜ほ
ま〻余有べ各其用意あるべしと申渡さる。即時ふ信長二条の御所
へ参上し将軍家へ朝倉ゞ不礼の条〻を言上げ彼国へ発向の旨を
請申さるるふ将軍家も先達て義景ゞ扶助せし由緒も有と
いへども。信長の訴へ公儀の大法といへ。是を緩るせもせば将軍の威
も立ゞ〻思召さ即ち信長ゞ申條を許さるる。信長謹て御請
申上御所を退出し諸将へ此由通達し四月九日京都を進発有て。
江州坂本ふ於て勢揃へとる。其日ハ堅田ふ宿陣あり翌九日若狭
国熊川ふ着せめい松宮玄蕃允ゞ籠ふ入御あり。十二日佐垣の栗
屋越中守ゞ館ふ着しめい此〻く軍評定あるて十五日ふハ越前

国敦賀ハ表へ発向あるべしと定めらるる。此時朝倉家ハ信長
三年以前上洛の後ゞ越前へ乱入あるんと常〻用心怠るとなく。
江越の境ふ要害を搆へ諸城ふ兵士を籠置専ら防戦の用意を
なしるる終ふ其沙汰なるしゞ当春信長何の故もなく上洛あ
るし支心得ゞ〻て間者を遣るて窺るもるる。五畿内の兵士ふ
上洛のし因出し注進しるるべ備ハ必定当国へ寄来るあるべし迚
大将ふ之を訴ふ義景因て則ち当国敦賀の郡代金ケ崎の城主朝
倉中務丞景恒三千余騎〻〻篭城せしめ同近邊手筒ゞ峰の
要害ハ究竟の地なるべしとて寺田采女五百余人〻〻守りしふ。
今般加勢〻て疋田右近律彼甚四郎九股左近ふ小本願寺の徒

を合せ〻三千余人みな〻守らせ〻景恒大小力を得て互に相と
な〻長蛇の陣を約束し今やくと待うけ〻

繪本石山軍記初篇巻之七終